

反逆の翼

タルト・タタン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友人に誘われて競馬場に足を運んだおっさんが、レースで負傷した馬を乗せたトラッ
クに轢かれて死んでしまった。

しかし転生神は間違えて、ウマソウルと人魂をまぜまぜしてしまった！
かくして、ウマ娘に転生したおっさんはどう生きるか！？

目 次

第一R	開催！プリティーフロンティア			
カツプ				
第二R	親友との買い物			
第三R	地方予選開幕！			
第四R	P F C 地方予選 ↘ 後日談			
24				
第五R	父と友人の愛			
第六R	不穏なレース			
第七R	目覚める力			
第八R	親友 ↘ P F C 関東予選 ↘			
53				
閑話	バレンタイン（小学校①）			
53				

第一R 開催！プリティーフロンティアカップ

転生してから早10年…この世界には面白いものがゴロゴロ転がってる。

?俺の名は白刃赤祢いや…シリヴァーレヴエルだ。

?ここは俺の前世の世界とは寸分違わぬがウマ娘と言う種族が存在していると言う事、そして競馬いや、競バが大人気だと言う事だ。そしてそう言う俺もウマ娘だ。

俺は前世では競馬というものに全く触れていない、だが、馬の名前くらいは聞いたことがある。ハルウララとかシンボリルドルフとか…あーあとコイツの名前も：「ナニタソガレテルノー」

おつ来た来た？トウカイティオー、コイツは隣町のレース（小学校低学年の部）で俺にアタマ差で負けたヤツだ。それから何回も競争して仲良くなり、ウチと隣町の間の公園でよく遊んでいる。前世でチラツと名前を聞いていたから名前を知った時はなんかピンときた。?

話が変わるが、二度目の小学生というのは思いのほか苦痛だな。テストでは毎回100点、天才と持て囃されるのもいいものだがいかんせん、小学4年生の問題解いた程度ではあまり達成感がない。

コ○ンくんもこんな気持ちだつのだろうか…? 今日も放課後は例の公園に行つて体力づくりだ。

初代イナ○マイレ○ンをリアタイで見ていた俺は円○守のタイヤ特訓を放課後毎日、日が暮れるまでやつている? テイオーもたまにやつてているが、幾らウマ娘とはいえまだ小学生、よく吹っ飛ばされては鼻血を出したり、擦り傷を負つたりしてしまう。その度母親に叱られるが最後は頑張れと言つてくれる。前世の母親も優しく、時に厳しい素晴らしい親だと思った。父親? まあまた今度だな: 「ダカラナニタソガレテルノー! ?」

? おつと、忘れてたw?

テイオー「そうだ! シル、これ見てよ!」?

シルヴァー「んーなになに? 『プリティーフロンティアカップ』日本1の小学生ウマ娘決定戦! ! ? 盛り込みすぎじゃねーか…」

? テイオー「低学年の部と高学年の部があるんだよーだからボクらは高学年の部に出るんだ。5年生や6年生の人達と:」ワクワク?

シルヴァー「ふむ、面白そうじやん」

? テイオー「うん! 絶対優勝しよう!! 今度は負けないよーシル! 」

? シルヴァー「おう! 中央トレセンで輝くためだ、日本イチくらいの称号持つてないとな! 」

? だが、まだ俺たちは知らなかつた…この大会が俺たちの人生：いやウマ生を大きく変える事になるとは……。

シルヴァーレヴエル現在小学四年生

転生したオツさんがウマ娘になつた姿。

髪： 銀色
眼： 銀色

髪型：ミディアム

流星：無し

リボンの位置：左耳

耳の長さ： 普通

しつぽの長さ：長め

性格：熱血大雑把で自称文系 脳筋でかつ、策略家

白刃赤祢

23歳独身のオツさん

転生神がねるねるを作つていた時、シルヴァーレヴエルを乗せたトラックに轢かれて

4 第一R 開催!プリティーフロンティアカップ

しまい人間として転生するはずが、シルヴァーソニツクのウマソウルとねるねるしてしまつたためウマ娘として転生した

白刃赤祢||シルヴァーレヴエル

トウカイティオー 現在小学4年生

隣町のレース以来親友ボジになつたウマ娘小学生時代はアプリ寄りの性格
中央トレセンに入つてからはアニメティオー

第二R 親友との買い物

プリティーフロンティアに出るため俺たちは朝早くに起きて走り込みや筋トレを行つた。年度末に大会が開催されるので、冬休みはティオーの家に泊まつて朝から晩までトレーニングをするつもりだ。俺も体力には自信があつたが、流石に小学生女子の体力についていくことは出来ず、途中でバテてしまつた。だがその分成長しているようで、息切れこそそれど2400mを走り切れた。しかし俺はウマ娘の身体能力に慣れていないためか、どうにも足腰のバランスが悪いらしく、ティオーに比べて無駄な動きが多いようだ。そうして毎日を過ごしているうちに年が明け、3学期が始まつた。そして始業式当日、俺はいつも通り学校に行くと、隣の席の子に声をかけられた

モブ子「そいえばシルヴァーちゃんってプリティーフロンティアに出るの？」

シルヴァー「ああ出るよ」

モブ子「へえ、じやあ私応援しちやう！」

シルヴァー「おう！ ありがとよ！」

この子は結構気さくな性格をしている。ちなみに彼女は俺のことを『シルヴァー』と呼んでいる。なんでも名前呼びの方が仲良くなれそうな気がするという理由らしい。

そんなことを話しながら授業を受けていくとあつという間に放課後になり、今日もまたティオーの家に向かつた。するとそこにはもう既に準備万端といった様子のティオーがいた。

ティオー「遅いぞー！ボク待ちくたびれたんだからね!?」

シリヴァー「すまんすまん。ちょっと用事があつてな……」

ティオー「むう……まあいいけどさ……。それよりほらっ！早速走ろうよ!!」

シリヴァー「そうだな。それじゃあ行くか！」

2人で軽くストレッチをして体を温めると、そのままコースへと向かつていった。

ティオー「ねえねえ！今度のレースは何賭ける？やつぱりお菓子とかかな？」

シリヴァー「おおいいぜ！その代わり負けた方は勝つた方の好きなお菓子とジュース奢りな！」

ティオー「いいよ！あ、でも合計で300円だからね！」

シリヴァー「よつしや！白ブドウジュースとカード付きウエハースは俺のもんだ！」

こうして始まつた今回の勝負。今回走る距離は2000mなので、俺にとつては丁度良い距離だつた。ティオーの方を見ると、やはり余裕があるのかニコニコしていた。

ティオー（ふふん♪今回は勝てるかも？）

シリヴァー（よし、俺の切り札は超末脚だ：落ち着いてスタミナをーーー）

スタートラインに立つと、俺は前傾姿勢を取りながらスタートした。最初のコーナーに差し掛かるところで、ティオーは既に加速しており、一気に差をつけられてしまった。

シリヴァー（まじかよ!! めっちゃ速いじゃん!!）

内心焦っているものの、まだ序盤ということもあり、ペース配分を考えつつなんとか食らいついていった。しかし中盤に入る頃にはティオーとの距離を詰めることが難しくなり、結局差は縮まらずにゴールインしてしまった。結果はティオーの勝利で終わつたのだが、正直悔しかつた。

ティオーは嬉しそうにしてこちらに向かつてきた。

ティオー「やつたー！ ボクの勝ちだね！」

シリヴァー「くそつ……あと少しだつたのになあ……」

ティオー「えへへへ♪ だつてボク最近負けてばつかなんだもん。たまには勝つてみた
いんだよ♪」

シリヴァー「ははつそりや残念だ。んじゃ約束通り好きな菓子奢つてやるよ」

ティオー「やつたー！ ありがとう！」

その後俺たちは近くのコンビニで買い物をした。ティオーはしつかり計算して300円ぴったりになるように選んでいた。そして帰り道ではまた明日も競走しようと思われた。

ティオー「次も勝つからね！」

シルヴァー「おう！ いつでもかかつてこいや！ 今度は負けねーー！」

それからというものの、毎日のようにティオーと競走をしていった。そんなある日のこと、ティオーから俺の家に遊びに来た時のことだつた。

ティオー「ねえねえシル！ プリティーフロンティアまで時間あるしさ、久しぶりに遠くに遊びようよ！」

シルヴァー「ん？ ……別に構わないぞ？」

ティオー「ほんと？ なら行こうよ！ ボク行きたいところあるんだよね！」

シルヴァー「わかった。準備してくるから待つとけ」

ティオー「はーい！」

ティオーが元気よく返事をすると、俺の部屋から出て行つた。俺もすぐに出かける支度を済ませると、玄関へと向かつた。

シルヴァー「お待たせ。それじゃあ行くか？」

ティオー「うん！ 行こ行こ！」

俺たちが向かつた先はティオーの住む街の隣町。俺から見れば隣の隣の街だな。まず最初に新しくできたショッピングモールに向かつた。なんでもここではかなり品数が豊富なウマ娘用のグッズショップがあるらしく、そこで色々見たいとの事だつたの

で、俺もそれに同意した。そろそろ新しい靴が欲しかったところだ。

ティオー「見てみて！これ可愛いでしょ！」

シルヴア「おお確かに。ティオーが履いたら似合いそうだな。買うか？」

ティオー「うううどうしようかな……。あつコツチも欲しいしなあ……。」

シルヴア「なあ色違いで同じ種類のシューズ買おうぜ！お揃いってのも良いだろ？」

ティオー「それ賛成ー！じゃあボクはこの黄色と白のシューズね！」

シルヴア「じゃ、俺は赤と白のシューズにするか」

ティオー「お会計お願ひします！」

店員さん「かしこましたー！5800円が2点で合計11600円になります！」

シルヴア（高え！！）

小学生のお小遣いってのはしょぼいもんだ後は昼飯を食う金くらいしか残つてねえ
！昼飯を抜いて電車で急いで帰るか？？

ティオー「大丈夫だよ！お金はパパから貰つてきたからさー！さつき電話でね、今日は

遅くなるかもつて言つたらね、『分かつた。楽しんできなさい』だつてさ！」

シルヴア「流石金持ち……太っ腹だな……」

そんなこんなあって買い物を終えた俺たちはそのままゲーセンに向かつた。そこに

はたくさんのクレーンゲームがあつた。ティオーはその中の一つの前で立ち止まつた。

ティオー「ねえコレやつてみようよ！」

シルヴアーネ「おおいいぜ！どれ狙つてるんだ？」

ティオー「あのパカぶち！ボクあれ取りたい！」

シルヴアーネ「おっしゃ任せとけ！」

俺もティオーもこういうのは得意な方なので、あつさりと取れてしまつた。

シルヴアーネ「ほれ、プレゼントだ」

ティオー「わあ！ありがとう！」

シルヴアーネ「気にするなつて。それより次はどこに行くんだ？」

ティオー「そうだな……

？

ティオー「あー！楽しかつたー！」

シルヴアーネ「ああ満足はしたが、走つた後とは違つた疲れが…」

ティオー「あはは……ごめんね。でもシルと遊ぶの楽しいからつい夢中になつちゃつたよ！」

シルヴアーネ「ま、俺は全然構わんけどな。お前の笑顔を見れただけで十分だしょ。」

ティオー「えへへへ♪ありがとシル！」

それから俺たちは帰路についた。帰り道の途中、ティオーがふと何かを思い出したよう話し始めた。

ティオー「そういえばシル。最近調子はどうかな?」

シルヴアーラ「ん。悪くはないぞ。ただちよつと物足りない感じはある。」

ティオー「む、勝者の余裕つてヤツ? 勝ち数が多いからつて油断は禁物だよー? 今度も勝っちゃうからね!」

シルヴアーラ「おう、お前相手に油断なんかするもんか。それ以外は油断ではなく余裕というわけだがな」

ティオー「まあこの辺のウマ娘でボクたちに勝てる子はいないからねー」

シルヴアーラ「そもそもウマ娘の数が少ないんだ、俺たちは一握りの強者つてわけだ!」

ティオー「選ばれた戦士つてヤツ? なんかシルつて男の子みたいな事言うよねー」

シルヴアーラ「え? いやこんな可愛い男の子がいてたまるかつての! ハハ、ハハハ

ハ:」

ティオー「:可愛いつて自分で言う? 普通:」

なんだこの気まずい空氣い!

シルヴアーラ「そ、それじゃあまた明日学校で会おうぜ!」

ティオー「うん!バイバーイ!」

ティオーに別れを告げて家に帰った。

⊗? 「何が選ばれた戦士だ：絶対に負けないぞ、トウカイティオー、シルヴァーレヴェルツ!!」

俺たちを見つめる謎の影には誰も気づかなかつた。

第三R 地方予選開幕！

プリティーフロンティアカップ（PFC）の内容は大規模でまず、一月末に地方で上位5着以内の者が次のステージに進める。俺たちは来週PFC地方予選に出るために猛特訓を続けている。

シリヴァー「よし、今日の練習は終わりだ！」

ティオー「あーもうヘトヘトー」

シリヴァー「おいティオー大丈夫か？」

ティオー「だいじょーぶー……」

シリヴァー「じやあ早く帰つて寝ろよー？」

ティオー「わかつてるよー……。それじゃお休み！」

ティオーはフラつきながら帰つていった。俺はそのあと一人で自主練を兼ねて帰り道を重りつきで走つていた。すると、一人の男が話しかけてきた。

男「君、少し良いかな？」

シリヴァー「はい？」

男「君はトウカイティオーと仲が良いようだね」

シルヴァー 「ええまあそれなりには。それがどうしましたか？」

男 「いや、君も彼女と同じレベルの強さを持つてゐるようだね。PFC、期待してい
るよ……」フリフリ

といつて男は立ち去つた。雰囲気的にどつかの偉い人だろうか？ テイオーのことも
知つてたし、URAの人か？ それともテイオーのお父さんの知り合い？

考へてもわかんねえ、早く家帰つて寝よう。

そして迎えた週末、ついにPFC地方予選当日となつた。会場であるレース場に着く
とそこには大勢の観客がいた。テイオーの姿もあつた。

テイオー 「あつ！ シル！ やつと来たー！ 遅いよー？」

シルヴァー 「悪い、ちょっと準備に手こずつちまつてよ」

テイオー 「もしかして緊張してる？」

シルヴァー 「まあ多少はな。でも楽しみもあるぜ？」

テイオー 「ふうん。まあボクたちなら楽勝だと思うけどね！ さ、行こつ？」

シルヴァー 「おう！」

俺たちは控え室に向かつた。そこにはロツクな格好をした長身のウマ娘がいた。

▢？ 「ん？ 私の部屋に何か用か？ 敵城視察というわけじやなさそうだな」

シルヴァー 「えつとー「待てッ！ 皆まで言うな、分かつてゐる…雑誌モデルである

私を訪ねてきたんだ、サインだろ?」キラツ☆
わかるぞ、コイツ……話が通じないヤツだ!

ティオー「え? あ、はい……?」

ティオーが引いてる……とりあえずここは俺の控室だし……
シルヴァー「あのーここはお'r 「だが待つてくれ! 私のサインが欲しいと言う人は沢山いる……だから我慢してくれ! ポニーチャン……」

ティオー「イラツ

シルヴァー「イラツ

なんだこのウマ娘? 勝手に話を進めやがって、しかもティオーの顔を見てみろ。明らかに苛立つてると!!

団? 「おっと、自己紹介がまだだつたな。私はエターナルメテオ。皆ご存知ビユーティフルなウマ娘だ!」

エターナルメテオ? どこかで:

ティオー「あー! Beauty Derby (雑誌の名前) に載つてた人だ!」

シルヴァー「ホントだ!」

メテオ「ふつふつふつ、バレてしまつては……え? 今気づいたの?」

シルヴァー「うん、そもそもここ俺の控室だし」

メテオ「え!?」ガタツ

メテオ「ええ!?」ガチャ

メテオ「ホントだあああ!!!」

ティオー「うるさいなあ」

シリヴア「なんでここにいるんです?普通に間違えたとか……」

メテオ「はつはつはつ!そ、そんなわけけないい図?じやないかあ……そ、そう!今回の一一番の壁になるであろう君たちを見にきたんだ!」

ダウトだろ、冷や汗やベーし

まあ自分の部屋だと思つてデカい態度とつてたのに部屋間違えたとか：恥ずかしすぎるもんな。

ティオー「へえうそうなんだー。それじゃあお互い頑張ろうね!」

シリヴア「俺たちは負けませんよ!」

メテオ「フツ、望むところだ!良いレースにしよう!」

ティオー「あ、もうすぐ時間だよ!」

シリヴア「マジかよ!急ぐぞ!」ダツ

ティオー「ちよつ速いよー!」

レース場にて

実況『さあ始まりました！PFC地方予選中距離部門！堂々の1番人気はは、エターナルメテオ選手です！』

解説『雑誌でも堂々の1番人気を誇っていますからね。彼女がただのモデルではないことを期待します』

実況『さて人気も実力も負けておりません！2番人気はトウカイティオーです！』
解説『浜の帝王』の二つ名を持つ彼女が最も勝利に近いとネットでも言われていましたね。その名に恥じぬ圧倒的な走りを期待しましょう。』

実況『2番人気との差は僅か！3番人気はシルヴァーレヴエルだ！』
解説『トウカイティオーと共に「白い隼」と呼ばれる程のスピードを持っています。彼女の超末脚に期待しましょう』

実況『さて続いては——』

パドックが終わってターフについた俺たちは誘導員の言うことに従つてゲートに入つた。俺は7枠7番、縁起がいいこつた！ティオーは6枠6番、これはまたフリー〇メイ〇ンとか言い出すヤツ居そうだな。

そろそろか、集中：ガコンツ
ヤベツ！遅れた！

実況『各バ一斉にスタートしました！まずは先頭に立つたのはエターナルメテオだ！その後ろにピッタリとついて行くのは、6番トウカイティオー！そして少し離れて4番、3番、8番、10番、12番！シルヴァーレヴエルは後方集団に紛れ込んでしまったか？』

シルヴァー「くつ、出遅れたか！だが位置取りは悪くない！このまま様子を見よう！」
第4コーナーぶつちぎつてやる！」

実況『さあ第1コーナーを抜けて最初の直線に入りました！ここで仕掛けたのはやはりエターナルメテオ！ぐんぐん加速していく！しかしそれを見逃さないのがティオー！一気に差が縮まる！』

ティオー「(こ)だ！」うおりやああああ!!」

シルヴァー「なつ!?（速すぎるぞ！作戦は先行じゃないのか?!）」

メテオ「w h a t , s !? 先頭は譲らんぞ！」グンツ

実況『トウカイティオーに迫られたまらずエターナルメテオ加速！』

解説『掛かっているかもしれません。冷静さを取り戻せると良いのですが』

内側でピッタリメテオの後ろをついているティオーはプレッシャーをかける感じで走っている

観客席では…

スーツ男 「これが小学生の走法か!? やはり彼女は素晴らしい!」

スーツ女 「では特別枠は彼女に?」

スーツ男 「いや、まだもう一人いる…彼女の末脚を見てみたい…!」

実況『さあ大ケヤキを越え第4コーナーに差し掛かります!』

解説『ここが仕掛けどころです。誰が飛び出すのか!』

メテオ 「まだまだあ!!」

ティオー 「負けるもんかー!!!」

シルヴァー 「(ここだ!!) おらあああ!!」

実況『シルヴァーレヴエルが来た! 後方から猛烈な追い上げを見せる!!』

解説『すごい勢いですね』

ティオー 「來た!」 グンッ

実況『先頭をキープしていたエターナルメテオがついに抜かれてトウカイティオーが
ハナに立つたー!!』

メテオ 「s i t！」

解説『しかしシルヴァーレヴエルの前にはスタミナ切れしたウマ娘がいます。上手く
避けるでしようか?』

3番ウマ娘 「むくり~」

5番ウマ娘「キツツーイ！」

シルヴァー「三人！」

実況『抜いた！垂れウマ二人を巧みなステップで躱した！そのままトウカイティオーニ迫る！』

ティオー「（えつ？こんなに速く走れたつけ？）」

シルヴァー「追いついたぞティオー！」

実況『トウカイティオーブレヴエル迫る！最後の直線だ！』

ティオー「負けるかー！」

シルヴァー「クソツ！届かねえ！」

実況『残り200m！先頭は変わらずトウカイティオー！』

解説『シルヴァーレヴエルは間に合いそうにありませんね』

ティオー「ボクだつて負けてられないんだ！勝つのはこのボクだよ！」

シルヴァー「ティオー！」

実況『トウカイティオーゴールイン！シルヴァーレヴエルは届きませんでした！』

ティオー「はあはあ……」

シルヴァー「はあはあ……くそつ！」

実況『しかし何と言うことだ！3着のエターナルメテオと5バ身差だ！しかも3着と

4着の差が18バ身！大差でゴールしています！』

観客「わー!!」パチパチ

ティオー「ヤツタアー！勝つた勝つたー！」

シリヴァー「負けた……俺の走り方じや勝てなかつたのかよ。もつと特訓しねーとな

…

観客席「ティオー！」

スース男「素晴らしい：彼らがいなければエターナルメテオが圧勝だつた：しかし彼女らはまだ『領域』を獲得していない、まだまだ成長の余地はある。見届けようじやないか、新時代の戦士たちを：」

実況『3番トウカイティオー！見事一位になりました！』

解説『シリヴァーレヴエルとはクビ差でした。トウカイティオーは良く頑りましたね』

観客席「ティオー！ティオー！」

ティオー「ふうー疲れたあ！でも楽しかつたなあ」

シルヴァー「おめでとうティオー！やつぱりお前は強いな！」

ティオー「へん♪まあね！シルヴァーもナイスファイト！」

シルヴァー「次は負けないからな！」

ティオー「次こそ勝つてみせるさ！」

控室に戻る途中、エターナルメテオを見つけた

メテオ「Congratulations! 素晴らしい走りだつたなトウカイティ
オー！シルヴァーレベルもあと一步だつたな」

シルヴァー「ありがとう、メテオも俺たちがいなければ大差で勝つてたのにな」

ティオー「そうだよ！メテオつて結構速いんだね！」

シルヴァー「はつはつはつ！だが次は関東予選だ！地方予選から上がつてきたまだ見
ぬ猛者たちとの闘いのために英気を養おうじやないか！それでは！」

メテオを見送り俺は関東予選について考えた

シルヴァー「次は関東予選だ、今よりももつとレベルが上がるはずだ！そうと決ま
りや特訓だ！」

ティオー「おー！」

こうしてPFC地方予選は幕を閉じた

確定

5 着	4 着	3 着	2 着	1 着	トウカイティオーナル
シルヴァーレヴエル	エターナルメテオ	コトリカモン	アヴェハート		クビ
3 / 4 バ身	大差	5 バ身			0 9

第四R PFC地方予選～後日談

???

シルクハットのウマ娘「で？見たところどうだつた関東予選で壁になりそなのは」
着物のウマ娘「特に気にするやつは…そうだなトウカイティオーとシルヴアーレヴェ
ルだな。あとは有象無象だつたぜ」

金スースのウマ娘「そんなこと言つてると足元掬われマスよ」

着物のウマ娘「うるせえぞ！この金ピカ野郎が！」

シルクハットのウマ娘「おいおい喧嘩すんなつて」

着物のウマ娘「チツ……ところで『スプリングボイラ』さんよお。アンタは問題な

いのか？聞けばマチカネフクキタルなんかが注目されてるじゃねーか」

ボイラード「それこそ問題ない。ヤツのスピードは私より上かもしけねーが、コツチには『これ』がある…」

金スースのウマ娘「本当にやるんデスね。まあ目的のためなら仕方ないか」

謎のウマ娘『スプリングボイラ』の計画はもう動き始めていた…

15時30分

例の公園にはティオーがいつも通り待つてるだろう。

学校で表彰されたり、校長先生のありがたーいお褒めの言葉を頂いてるうちにティオーとの待ち合わせ時間を過ぎちまつた！多分許してくれるだろうけど、申し訳ねえな

⋮

ティオー「ワカツタカライツキニコナイデヨー！」

な、何だか騒がしいな？ま、まさか…

男子「昨日のレース見たよ！すごかつたよティオー！」

女子「かつこよかつたなーティオーちゃんとシルヴアーチyan！」

おじさん「アンタらはウチらの街の誇りだよ！」

おばさん「そういえばシルヴアーチyanはまだ来ないのかえ？いつもならここで練習してるはずなんだけど…」

ティオー「あはは……みんなありがとう！ボクたちはこれからトレーニングだからまたね！」

俺が来た時には既に人集りが出来ていた。

そしてその中心にいるのはもちろんティオーである

シルヴァー「ティオー、コツチ！」

ティオー「あつ！シルヴァー！」

俺はティオーの手を引つ張り群衆から脱した。

ティオー「ごめんねシルヴァー、遅れちゃつたね？」

シルヴァー「いいや大丈夫だ。それより今日はどこで走るんだ？」

ティオー「うーんとね、河川敷かな！」

シルヴァー「わかつた、行こう！」

ティオー「うん！」

俺たちは河川敷に向かつた

ティオーとは毎日のように走つてゐるが、毎回新しい発見があつて楽しい。

しかしティオーの人気つぶりよ

ティオーのレースを見てファンになつた人たちがたくさんいるようだ。

いや、俺も同じ様なもんか…学校でも2着だつたのにまるで優勝インタビューみたいに群がつてきやがつたからなー：

チヤホヤされるのは悪くねーけど……

一通りいつも通りの練習を終え、日が傾いてきた。

今日から重りをつけて特訓していくから疲労がすごい：これで家まで走つて帰ると

思うと気が滅入るな

冬の肌を刺激するような寒さの中汗を流しながら帰ると着込んでいたジャージが濡

れてしまう。上着を脱ぎ腰に巻くとふと、腕から湯気が出ているのがわかつた

シリヴァー（……ギア2！何つつてw）

年相応の遊びをしながら家に帰った

今日は母が家に帰つて来れない日だ。こうしてたまに仕事場の状況に応じて帰れる時間が変わるのだ。おそらく深夜あたりに帰つてくるだろう。

だが問題はそこではない。

シリ父「：帰つてきたかレヴエル」

シリヴァー「父さん：」

親父が帰つてきていると言ふことだ。

第五R 父と友人の愛

シルヴァー「……ただいま」

シル父「地方予選、見せてもらつたぞ」

シルヴァー「……ツ！」

やつぱりか…いやUR Aの職員なんだ、知つてて当然か
シル父「2着だつたな、トウカイティオーくんに負けて…」

シルヴァー「……」

シル父「…」スツ

親父の手が伸びてくる

ああ、またいつものか…もう嫌だなあ

父「よーしょしょしょしょしょしー！頑張ったなー！さすが私の愛娘だ!!」グシャグシャ

シルヴアーノ「…………」アタマグワングワン

頭を撫でられるのは嫌いじゃない。むしろ好きだ。

ただ元おつさんだつた俺がおつさんに撫でられて頬擦りされるんだぜ…………？

優しい親の愛情だ、受け止めよ……やっぱキツい

シル父「よくやつたぞレヴエル!! お前はやればできる子だつて信じていたぞ!!!」

シルヴアーノ「…………う…………う…………う！」

前世ではこんな風に褒められたことなんてなかつたし、そもそも父親が酒クズのタバコ野郎で母さんと俺に暴力振るつて豚箱行きになつたクズだつたからな

この世界に転生してからも、ウマ娘としての生活は楽しかつたが、やはりどこか

満たされない部分があつたのかもしれない。だから、こうやつて褒めてくれるだけで

涙が出そうになるくらい嬉しいんだ。

シル父「どうした？ 嬉しくないか？」

シルヴアーノ「ううん…………違うの…………ありがとうお父さん…………！」ギュ―

シル父「おお！ おおお！ 可愛い奴め！」ナデナデ

俺は今、幸せだ――――――

1時間抱き合つた後父さんがカルボナーラを作つてくれた

シルヴアーノ「いただきます！」モグモグ

シル父「うまいか？ レヴエル」

シルヴァー「はい！ とつても美味しいです！」

シル父「そうかそうか！ いっぱい食べろよーー！」

本当にいい父親を持ったもんだよ……

ご飯を食べ終えると、自室に戻りベッドに寝転がる

シルヴァー「はあ～……」

今日は疲れたな……早くねよう……

俺の意識は闇へと消えていった 翌朝目が覚めると体がダルかつた
シルヴァー（あちゃー……昨日のアレが原因かな？）

確か昨日は風呂上がつたあと髪も乾かさずに薄着で寝たからな……

俺はウマ娘になつてから風邪をひいたことがない。

それどころか怪我すらしないのだ。

ウマ娘の体には人間の体の常識は通用せず交通事故の際も車側が大破するなんて漫

画みたいなことも起こる

だがウイルスへの耐性や抗体はヒトとそこまで変わらんらしい

シルヴァー「ま、今日は学校休みだしゆつくりするか……」

そして、二度寝に入ったその時だつた。

ピンポーン　家のチャイムが鳴つた。

シルヴア－「誰だよ……つたく」

玄関に向かい扉を開けるとそこには……

「おはよー・シルちゃん！」

シルヴア－「……えつ!?」

そこには隣の席の子がいた

そ言えばあの時言つてなかつたけど、この子の名前は『席隣子（せきりんこ）』元気いっぉいで優しい子だ。

シルヴア－「ど、どうしてここに……？」

席「お母さんから聞いたんだけど、シルちゃんが風邪引いたって聞いて心配になつてきちゃつてさ！ほら、これあげるから飲んでみて！」

シルヴア－「これは……薬？」

席「うん！私が作つたの！効くと思うから試してみて欲しいなつて思つて！」

シルヴア－「作つたあ！」

科学者の娘だけに理科の化学実験とかすげー手際よくできてると思つたら、風邪薬開発する程とは…

まあ一応貰つておこう、酷くなつた時に最終手段として使おうか…

シルヴア「ありがとう、助かるよ」

席「いえいえ！じやあお大事にね！」

シルヴア「ああ、わざわざありがとな」

席「うん！また明日学校で会えるといいな！」

シルヴア「そうだな、またな！」

ガチャリ

シルヴア「ふう……」

まさかあの子が見舞いに来るなんてな……

まあもう一年近い付き合いになるわけだし。来年も同じクラスがいいな……そんなことを考えながら再び眠りについた。

―――――― 翌日、体調が良くなつたので登校すると……

席「おはよう！シルちゃん！」ニコツ

シルヴア「ああ、おはよう」

席「大丈夫だつた？」

シルヴア「もう治つたから平氣だぞ」

席「良かつた……でも無理しちゃダメだからね！」ナデナデ

シルヴア「……ツ……うん//」

(隣子の手あつたかいな……それになんか落ち着くかも……)

先生「ういーすお前らー席につけえー。さもなくば俺の失恋エピソードPart24を聞かせるぞー」

「[]」 ガタツ ガタツ ガタツ ガタツ

先生「…そんなに嫌か？先生泣いちやうよ？」

シルヴアーネ（誰だつておつさんの失恋エピソードとか聞きたくねえよ。つか、たまに

普通の会話に混ぜて話してくるから厄介なんだよ）

――――――

放課後

シルヴアーネ「……よし、帰るか！」

席「シルちゃん！」

シルヴアーネ「ん？どうした？」

席「一緒に帰ろう！」

シルヴアーネ（ティオーとの待ち合わせには時間あるしな）「いいぜ！」

帰り道

シルヴアーネ「そういえば、昨日はありがとうな」

席「いいよ別に！友達なんだしさ！」

シルヴアーネ「……そーか」

席「……ねえシルちゃん」

シルヴア「なに？」

席「……その、シルちゃんは好きな人つているの？」

シルヴア「えつ……!?」

席「いや！変なこと聞いちやつてごめんね！ただよつと気になつちやつて……」
シルヴア（好きか……正直なところ俺にはまだ恋愛感情というものがよく分からな
い。前世ではそういうのとは無縁の人生を送ってきたからな……）

シルヴア「……俺は……まだいないかな。そもそも恋つてどんな感じなのかも良く
分かつてないし」

席「そつか……なら、私が……いや、なんでもない！／＼／＼ プイツ

シルヴア（聞こえますけどおおお!?え？なに？私が？うそ、隣子の奴まさか
いや、真実を確かめねば……）

「なあ隣子は好きな子いるのか？」

席「へえあ!?」

シルヴア「おい、声裏返つてるぞ……」

席「べ、べつにシルちゃんのことが好きとかじやないんだからね!?」

シルヴア「」

席「あつ……ち、違うの!今のはその……えつと……!」

シルヴア「……ふつ……くくく」

席「……えつ」

シルヴア「冗談だよ。隣子慌てると面白い反応するからついからかっただけだ」

席「……そ、そうなの?」

シルヴア「ああ、そうだ」

席「……そつか良かつたあ……」ホツ

シルヴア「……隣子、一つ聞いてもいいか?」

席「……な、何?」

シルヴア「俺が将来中央トレセンに行くって言つたお前は俺を見送つてくれるか

？」

席「……ちょっと寂しいけどそれがシルちゃんの夢なら応援するよ!」

シルヴア「……そつか、ありがとな／＼／＼

席（……この気持ち……胸の奥、がきゅつてなる感覚。やっぱり私、シルちゃんのコトがスキなんだ……）

シルヴァー（……隣子、俺はお前の思いには……）

——— テイオーとの集合場所にて

シルヴァー（やべえ、なんか心のモヤが晴れねえ……どうしちまつたんだ俺エ）

ティオー「シル？ 元気ないねー？」ヒヨコ

シルヴァー（こいつ、たまに突然現れるよな。）

シルヴァー「なあティオー。もし、もしもだ。俺がトレセンに行つたら……ずっと側にいてくれるか？」

ティオー「もちろん！ だつてボクもトレセンを目指してるからね！ トウインクルシリーズで活躍しまくつて皆んなに無敵のティオー様つて呼ばれるんだ！」

シルヴァー（……そうか、こいつは夢に向かつて頑張つている。それに比べて俺は……決めた。もう迷わない。俺は……）

ウマ娘として、選手として生きていく）

第六R 不穏なレース

PFC 関東予選当日

ナレ『さあ始まります、小学生ウマ娘日本一を決める大会『プリティーフロンティアカップ』関東予選！地方予選とは違いA・B・Cのブロックに別れてもらい、八名づつ出走してもらいます！今回は各ブロックの上位三名のみが次の最終予選に出場権が与えられます！』

シリヴァー「……よし、行くか！」

アナウンス「選手の皆さんには各ブロックに別れていただきためクジ引きをおこないます！」

ティオー「だつて、行こう！」

シリヴァー「ああ、なるべくお前やメテオさんと当たらない方がいいな…」

ティオー「そーだねー闘うなら決勝で闘いたいし」

シリヴァー（ティオーはともかく、メテオさんの実力は地方予選の時より遥かに上昇している…あの周りを焼き尽くさんとするオーラ、俺やティオーでも勝てるか…）

ティオー「シリ！シリ！」

シルヴァー「ん? どうした」

ティオー「この前2人で買ったシユーズ、コーティングしてきたんだ! 今日のレースで使おうよ! はい、シルのシユーズ」

シルヴァー「お、サンキューティオー!」

ティオー「ふふん♪」

司会「では今からクジを引いてもらいます! 引いた方は番号を見せてからこちらへ!」

シルヴァー「よし俺が1番だな……俺の番号は……B—5だな」

ティオー「どれにしようかなー…これ! C—2だ!」

メテオ「私はA—1だ」

カモン「アタシはB—2!」

アヴェ「私はC—4ですね」

シルヴァー（綺麗に別れたな、一緒なのは前走4着のコトリカモン、そこまでマークしておく必要は無さそうだな）

司会「次々お願ひしますよー!」

???「はーい」ズツ

シルヴァー（うおつ! なんだこの…）

ティオー「うわーおつきい子。やつぱ6年生かな?」

???「いえ、5年生です!」

ティオー&シルヴアーネ(えつ……?聞こえてた!)

司会「はい『ヤマノイタダキ』さんですね」

ヤマノ「はいC—8です!」

ティオー「ボクと一緒に!?うわー1番の壁だあ」

シルヴアーネ「心配すんな、何のためのタイヤ特訓だつたんだ!…こういう時に特訓の成果が活かされるんだ!」

ティオー「そ、そつか!じゃあ一緒に頑張ろう!」

シルヴアーネ「おうよ」

司会「はい、これで全員引けましたね?それでは各選手ブロック別の控え室に移動してください」

Aブロックはエターナルメテオの圧倒的な威圧感の前に地方を勝ち進んだと言えど
まだまだ小学生、萎縮して2着とは大差だつた。

次は俺だマークすべきはヤマノイタダキと同じ出の『コヤマムスピ』だ。
コイツもデカイ:150cmはあるぞ?

ちなみに俺は134cmだ

コヤ「よろしくねー」

シリヴア「ああ、負けないぜ?」

コヤ「それはこっちのセリフだよー」

レース開始まであと少しだ。

コヤ「ねえ君」

シリヴア「ん? どうした?」

コヤ「レース中のボクには気をつけなよ?」

シリヴア「……なに?」

実況『各ウマ娘一斉にスタートします! まず最初に飛び出したのはコトリカモン! そのすぐ後ろにコヤマムスピ、そして1番人気シリヴアソニックは最後方中団ではミドリノバンチョーが他のウマ娘にプレッシャーをかけて前に出さないようにしています!』

シリヴア(あの野郎……どういう意味だ? 激突に気をつけろってことか?)

実況『ここで先頭集団に変化あり! コトリカモンが徐々にペースを上げていきます! これはレース展開に大きな変化があるかもしれませんね! しかし後続も遅れずについていきます! さあどうなるか! 最初のコーナーに差し掛かります! さあ誰が仕掛ける

のか!? おつとコヤマムスビがコトリカモンに近づいた! コヤマムスビがどんどん伸びていく!』

シルヴアーノ (いや違う、コトリカモンが落ちてきてるんだ! 何をしやがった?
だが俺も仕掛けさせてもらうぞッ!!)

加速する!

シルヴアーノ (まだだ! もつと早く! もつと速く!)

さらに加速する!

シルヴアーノ (もうちよいだ! もう少しで抜ける!)

コトリ 「……」

シルヴアーノ (よし抜けた! あとひと……)

コヤマ 「調子に乗ってんじゃねえぞチビが……」

シルヴアーノ 「ツ!」 ゾワツ!!? (なんだ今のは殺氣は! やばい! このままだと……)

コヤマ 「邪魔だ……消え失せろ……!」

シルヴアーノ 「くつ……間に合ええ!!」
ゴツ

シルヴァー「ぐう……ツ！」

実況『あーっとシルヴァーレヴエル勢いがつき過ぎたのか前を走るコヤマムスビに接触してしまったー！しかしまだ加速を続けています！一体どこにこんなパワーがあるんだー！？』

コヤマ「チツ……転倒は避けたか、運のいい奴だぜ」

シルヴァー「それが：アンタの本性：か」

コヤマ「ザコが俺様と競り合うにはちと小さすぎんだよ。だから簡単に吹き飛ぶ、ゴミが吹き飛ぶ様見るのは心地いいぜ：」

???「ふざけんなやあ！」

コヤマ・シルヴァー「[?]」

実況『残り400mに差し掛かる！ここでミドリノバンチョーが先頭に並びかけてきたー！』

コヤマ「な、なんだアイツは！」

シルヴァー（まさか……）

コヤマ「おいテメエ！なんのつもりだ！そこをどけやあ！」

ミドリノ「暴力振るつて勝つの選手としてクズだ！名家で特訓したパワー見せちゃ

らあ！」

実況『さあスリートップが並んだ！一番にゴール板をくぐるのは誰だー！？』

コヤマ「クソがああああああ！」

シルヴァー「……ツもう…一踏ん張りだ、とどけえ…」

ミドリノ「ぬああああ！」

ドサツ

実況『シルヴァーレヴエルだーー!! シルヴァーレヴエル倒れ込んでゴールイン!! 1着

は1番人気『シルヴァーレヴエル』だ!!』

救護員「担架だ！ 急げ!!」

チクショウ……ギリギリ勝ちか

もつと……がん……ば……

ワーワー

シリ～シツカリシテヨーシナナイデーウワーン

コヤマ「……チツ」

ミドリノ「ぬう、負傷者に負けたか：万全の状態なら完敗だつたろうなツ」ギロツ

コヤマ「そんな顔で見ないでよー、ボクこわーい」

ミドリノ「…………女狐めが」

実況『さてアクシデントはありましたが次に進みます！Cブロックの選手はパドック

「へどうぞ！」

「テメエはアイツの二の舞にならなきやいいけどなあトウカイティオー……」

第七R 目覚める力

係員「トウカイティオーさん、早くして下さい！ほかの選手はもうゲート入り前ですよ！」

ティオー「シル、行つてくるね」

ティオーは負傷し医務室のベッドで眠るシルヴァーレヴエルの頭を撫でてその場を後にした。

係員「あ、そうだティオーさん、コヤマムスピさんと同じ出のヤマノイタダキさんは気をつけてくださいね？彼女もまたレース中はかなり荒れますから……」

ティオー「……うん、絶対負けない」

実況『先程はアクシデントがありましたか、今度は皆さん無事に走り終えてもらいました！Cブロック出走バをご紹介します！まずは1番2番人気のヤマノイタダキ！その巨体はまさに壁！逃げの彼女を追い抜くことができる娘はいるのか!? 続いてはアヴァハート！優雅な足運びで勝利を収めるか!? 続いて……』

ヤマノ「……」

ティオー（あの子……すごく落ち着いてる。すごくレース慣れしているみたいだ）
ヤマノ「……あの野郎の前で無様を晒すわけにはいかねえな」ボソツ

実況『そして1番人気！トウカイティオー！やはり人気はこのウマ娘ですね！今回は
どんなレースで魅せてくれるんでしょうか？他にはない末脚で勝利を掴むことができ
るのか!? まもなく出走です！』

ヤマノ「……」

ティオー「……ふう」

アヴェ「ゴクツ……」

実況『各バゲート入りしました！……そしてゲートが開かれ各バ一斉にスタート、ヤ
マノイタダキが早くも先頭を走っていきます』

ヤマノ「……ンツ！」

ティオー（速い！でも僕だって！）

ヤマノ「……来ましたね」

ティオー「……ツ」

ヤマノ「お先に失礼いたします」ニコツ

ティオー「えつ？」

ヤマノ「フツ！」

ヤマノは一気に加速し、ティオーを突き放した。

ヤマノ「……」

ヤマノは後ろを見ることなく感覚のみで相手の位置を把握していた

そしてあまりのスピードに何が起ったか理解出来なかつた者も多い中、ティオーは
加速も減速もせず自分のペースを保つことに集中していた

モブ「くそッ！」

実況『おおつとここでモールスブラックが前に出た！』

解説『急加速したヤマノイタダキの影響で掛かってしまったようですね』

ヤマノ「……ッ！」

ヤマノは更にギアを上げていった

実況『ヤマノイタダキが後続を引き離そうとさらにスピードを上げた！まだ第二コーン前ですが、これは正解でしょうか？』

解説『彼女の脚質やスタミナを考えると良いのかも知れません。しかし彼女を追わなければ逃げ切られ、追えればスタミナを切らしてしまいます。さらに前に出ようとすればあの巨体を避けて行かなければなりません。外に回ればさらに体力が削られてしまいますが、実況『彼女だからこそできる作戦というわけですね！』

ヤマノ「……ハア……ハア……もう少し……上げるか」

テイオー「……ウソ」

(すごい、ホントに同じウマ娘なの……?)

実況『さあ第三コーナーに入りましてヤマノイタダキがグングン差を広げていく!』
解説『恐ろしい才能ですね。今後の彼女やトレーニング内容が気になります』

ヤマノ「……まだまだこれからですよ」

テイオー(また加速した…)

実況『さあここで第四コーナーカーブ先頭は変わらずヤマノイタダキ、そして加速を
続けていた1番人気トウカイティオーが先頭を狙っている』

解説『絶えず自分のペースを保ち続けたことで余力を残して二番手に躍り出ました
ね。しかし大きなバ体を持つたヤマノイタダキを躊躇することが出来ればいいのですが』

ここでヤマノイタダキから発する赤い闘志が赤黒くなつたのをメテオは見逃さなかつた

メテオ(そうか…このレースに参加した『ヤマノイタダキ』『コヤマムスピ』そして私
と走った『アカノセキ』こいつらは全員同じ作戦でカーブの後にオーラが黒くなつた
……)

??? 「気づきましたか」

メテオ「ああ、そして同じように二番手の選手を潰しに来る……！」

ヤマノ「ククツ……さあ来いよトウカイティオー……シルヴァーレヴエルの様に病院送りにしてやる……！」

ティオー（あんなの避けれるわけが無い……でも諦めるの？シルは諦めなかつた……フラになつても、走つて1着を取つた）

ボクにも

いや、ボクだけの力で

壁をこえる

” 最強ティオーステップ ”

ヒュツ

ヤマノ「は？」

実況『なんと！トウカイティオー、ヤマノイタダキを躊躇し先頭についた!!』

ティオー「これが……ボクの……全力だあああああ!!!」「グオオ!!
実況『トウカイティオー!今ゴールイン!2着にはヤマノイタダキ!3着にサンダー
ウルフが入りました!』

「「……」」 ポカーン

ヤマノ「……ツ」 プルプル

ティオー「やつたー!勝った!」

ピヨン 実況『トウカイティオー!見事勝利!見事な走りを見せてくれました!』

解説『最後まで諦めなかつたことで勝利出来ましたね。しかしヤマノイタダキも素晴らしい逃げを見せてくれました。今後彼女がどう成長するのか楽しみです』

ティオー「うくん!疲れたけど楽しかった!」

ヤマノ「くそつ……この私が負けただと!?ふざけやがつてえ……ツ!」

ティオー「びえつ……」

??? 「情けないねえー」

ヤマノ「なツ!?

??? 「体格、スタミナそしてあの状況…何もかもお前が優勢だったにも関わらず無様に

負けた』

ヤマノ「う、うるせえ!!あんなのナシだつ!俺が負けるわけねえ……こんな……ガキにツ」

ティオー「えっと、誰……?」

??『お前さんは知らんだろうが私は知ってるさ。『トウカイティオー』……巷で噂のウマ娘でPFCの優勝候補の一人』

ティオー「ボクってそんなに有名になつたの?」

団?「ああ、そして私の大ツ嫌いなヤツの一人さ……」

ティオー「…え?」

???「まあ今は争うつもりは無いしな、お前はさつさとオトモダチの所にでも行つてきな」

ヤマノ「おい、俺を無視すんな!そもそもてめえは何しにきやがつた『スプリングボイラーワー!』」

スプリング「無様に負けたあんたにはもうお役御免つてこと言いに来たのさ」

ヤマノ「なッ!?どういう意味だよ!」

スプリング「そのままの意味さ。喧嘩ならやめとけよ?あんたが私に勝てる要素なんてないんだからな」

ヤマノ「なにい……！」

ティオー「……なんかよくわからないけど、喧嘩しないでよー！」

ヤマノ「ぐぬう……！」

スプリング「ほら、さつさと帰れよヤマノイタダキ」

ヤマノ「覚えてろよ……トウカイティオー……！」

ティオー「……行っちゃった、あ！ そうだ、シルー！」

第八R 親友♪PFC関東予選後♪

メテオ「ティオーちゃん！無事かい？」

ティオー「うん！なんとかね！それよりシルは大丈夫？」

メテオ「ああ、心配はいらないさ。貧血になつてただけさ。時期に目を覚ますと思う」

ティオー「よかつた……本当に……良かつた：グスツ」

メテオ「よしよし泣いてちやダメだぜベイビー、シルヴァーちゃんが起きた時に心配してしまったからね」ナデナデ

ティオー「血を流して倒れてるの、見たとき……もう一緒に：走れないんじやないか……つて：グスツ」

メテオ（そうか……こんなにも彼女のこと大事に思つてているとは……）

ティオー（シルはいつもボクの傍にいて、一緒に笑つてくれる大事な親友なんだ。だから絶対失くしたくない！）

メテオ（レース中に感じたのはこの子の素質……そしてオーラの色：おそらく……）

シルヴァー「……んん」

メテオ「おつと、目が醒めたようだね。気分はどうだい？シルヴァーちゃん」

シルヴァー「ああ、悪くはないさ……」ムクツ

ティオー「あ、起き上がりつちや……！」

シルヴァー「ティオー……レースは？……勝ったのか？」

ティオー「う、うん……ボク勝つたよ！」

シルヴァー「……そつか、やつたじやん」ニコツ

ティオー「シル……！」ギュツ

シルヴァー「ちょ、ティオー！」

ティオー「シルが倒れた時ボク……怖かつたんだよ……シルがいなくなつちやうん
じや無いかつて思つて……ボク……ボク……!!」

シルヴァー「……ごめんな、ティオー。でも俺はここにいる。約束しただろ？また一
緒に走るつて」

ティオー「……うん」シルヴァー「それに、俺はまだ諦めたわけじゃない。必ず治し
てみせるさ」

ティオー「……本当？」

シルヴァー「ああ、ティオーとの誓いを破るわけにはいかないからな」

ティオー「……わかった！じやあ早く怪我なおさないとね！」

シルヴァー「おう！任せとけ！」

メテオ「私は先生に知らせてくるよ」

シリヴァー「ありがとうメテオさん」

ティオー「ふわゝ眠くなつて来ちゃつた……」

シリヴァー「……ここ会場の医務室だぞ？ オレはあとからウチの地区の病院に移されるからいいけど、」

ティオー「……ZZZ」

シリヴァー「寝るんかい！」

ティオー「……んん」

シリヴァー「……まつたく、しようがないな」

ティオーの頭を撫でながら微笑むシリヴァーレヴエル その顔はとても優しいもの
だつた

「……ありがとなティオー」

ティオー「……んフフ」スースー

シリヴァー「……可愛い奴だ」

ティオー「……すーすー」

シリヴァー「……おやすみティオー」ウトウト

メテオ「シルヴァー君、先生を……おやおや、これは」

先生「可愛らしいですね」

夕日が差し込む病室の中、ベッドで眠るシルヴァーレヴエルと、それに寄り添う様にトウカイティオーがうつ伏せに眠っていた

閑話 バレンタイン（小学校①）

バレンタイン

それはリア充共が吐きそうな程甘い雰囲気を出し、非リア共が某ギャングのボスに負けないくらいの邪悪なオーラを醸し出す、そんな *chaos days* である（個人の感想です）

そういうオレも期待していた時期があった。

そうそれは中学二年の頃：女の子との出会いを求めて勉強のできるインテリキキャラになろうとしていた時期だつた。

クラスで唯一仲良くしていた女子にチョコを貰えないか期待していた、だが放課後彼女はオレの前の席の奴に告白していたのだ。オレと仲良くしたのは、前の席の奴に近づくためだつたのだ！

オレは泣いた、家に帰ると苦手なはずなのに、母が手作りチョコを用意して待つていたのだ！またオレは再び泣いた。

そして今世、ウマ娘となつたオレは渡す側になつてしまつたのだ：

シルヴァー「よしつ父さんの分と隣子の分はできたぞ、あとはティオーニだな」

シルママ 「あらあらお母さんの分はないのかしら？」

シルヴアーネ 「ちゃんと作るよ……余った分でねw」

シルママ 「えーん娘が冷たーい！」

シルヴアーネ 「冗談だよ！はいこれあげる」

シルママ 「わあーありがとう！シルヴアーネ」

チヨコレート作りを終えバレンタイン当日オレは学校へチヨコを持って向かつた。
オレはいつも通り学校に行くためにバスに乗つた。するといつもより乗客が多い気がした。

カツプルやら女子同士やらがかなり多かつた。

（この中に前世のオレと同じ境遇の人がいるんだろうな……）

そんなことを考えていると、急に後ろから声をかけられた。

「あの……」

シルヴアーネ 「はい？なんでしょうか？」

振り向いてみるとそこには可愛らしい制服を着た中学生ぐらいの女の子がいた。

「その……応援してるね！これ受け取つて!!」

女の子は顔を真っ赤にしてチヨコを渡してきた。応援？PFCのことか？小学生の大会でもファンはつくものなんだな。

「頑張つてね！」

そう言つて女の子はバスを降りていった

シルヴア－「…現役のウマ娘もこんな感じなのかな」

学校に着くと男子達は女子の方をチラチラと見ていた。中には何度も靴箱やロツカ－を確認する子もいた。当然ウマ娘であるオレにも期待の目が少なからず向けられていた。

すると一人のクラスメイトの男子が近づいてきた。

「なーシルヴア－ちゃん：チヨコ作つた？」

こいつは確かオレの前の席に座つている男だ。名前は……忘れた。まあいいか、とりあえず答えよう。

シルヴア－「そりやあもちろん？」

「はあ…貰える相手が羨ましいねえ」

そう言つて男は崩れ落ちた。

「ちくしょう……俺だつて本命の子からチヨコ欲しいよ……」

シルヴア－「そうか……ならくれそうな子に頼んでみればいいんじやないか？」

「そんな子いないよ……」

シルヴア－「諦めるのは早いと思うぞ？」

「うう……今更仲良くなるなんて無理だよ……」

シルヴァー「確かに難しいかも知れないけど、何もしないで後悔するよりやつて後悔した方がいいと思わないか？」

「……そうだな！ありがとよ！ちょっと頑張つてみる！つてことでチョコくれ！」

シルヴァー「断る」

「ちえつやつぱりダメだつたか」

シルヴァー「すまんな……」

「いいよいよ、なんか元気出たし！サンキューな！」

そう言うと彼は自分の席に戻つていった。

それからというものの休み時間になると何人もの女子生徒がオレの元にきてチョコを渡しに来た。その中には隣のクラスの生徒もいた。

「はいこれ！私が作つたんだ！」

「私のもあげる！」

「PFCみんな応援してるね！」

などとたくさんのチョコを貰つた。

シルヴァー「ハハハ、ホワイトデーが大変だな…」

「昼休みー」

シルヴア「隣子、あのさチョコ作つてきたんだけど…貰つてくれるか？／＼／＼

隣子「ホントッ？嬉しいー！シルヴアーチやんの手作りなんて♡」

シルヴア「喜んでくれて何よりだ／＼／＼

隣子「じゃあ私も、はいツ」

シルヴア「ハート型：愛を感じるな：なんつって／＼／＼

隣子「もうツシリヴアーチやんつたら♡」

こうして無事に隣子とチョコを交換し終えると次はテイオーの番だ。
—いつもの公園—

テイオー「やつほーシリー！んや？その袋何かな？」ニヨニヨ

シリヴア「揶揄うなよーほらチョコ作つてきたぞ／＼／＼

テイオー「まさか手作りー？ボクが本命なの？いやー照れるな？」

シリヴア「ばつか／＼／＼友チョコだよ」

テイオー「ふーん……まあいいや！はいボクからもどーぞ！」

シリヴア「おお！ありがとう！開けてもいいか？」

テイオー「うん！いいよ！」

シリヴア「どれどれー……おつ！マカロン？」

ティオー「うん！チョコ味のね！シルのは？……蹄鉄型のチョコ？」

シルヴアーノ「在り来りかな……ウマ娘と言えばで考えたんだが……」

ティオーノ「もしかしてシル、渡すチヨコによつて意味が違うつてこと知らないの？」
シルヴアーノ「え!? そうなのか!?!」

ティオーノ「うん、だからね……」ギュツ

シルヴアーノ「ちよつ! 急にくつつくなつて！」

ティオーノ「このチヨコは、あなたは特別な人です」つていう意味があるんだよ? つまりボクにとつて君は特別だつてことだよ?」

シルヴアーノ「マカロンつてそういう意味なのか//」

ティオーノ「どう? ドキドキした?」

シルヴアーノ「ああ……凄いなお前……」

ティオーノ「あはは……実はね、朝からずつとシルのこと考えてたんだ……」

シルヴアーノ「//」

ティオーノ「シルつてばさつきから顔真っ赤ー//」

シルヴアーノ「それはお前もだろー!/?//」

ティオーノ「そうだね……ねえシル、これからもずーっと一緒だよ?」

シルヴアーノ「ああ……オレたちはいつまでも親友だ!」

こうしてオレたちのバレンタインは終了した。案外バレンタインも悪くないな